

時代・世代・地理を 超えた人間性

——パール・バック『大地』から

広島大学大学院教授 新田玲子

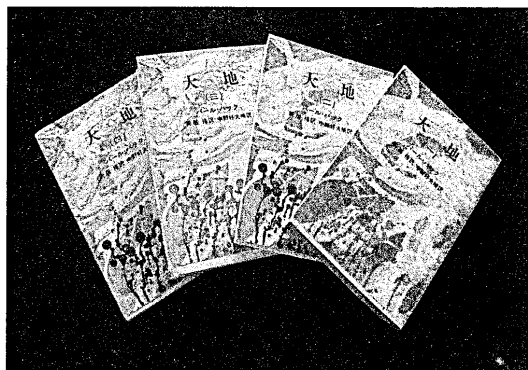
グローバル化が加速し、時代が急速に変化している昨今、私たちは何を拠り所に、どのように生きてゆけばよいのか、改めて問い直されているように思います。そこで今回は、19世紀終盤から20世紀初頭の激変する中国で、己の生き方を探し求めながら懸命に生きる人々を描いた『大地』を読み直し、彼らの生き様から何らかの指針が得られないものかと考えました。

『大地』という作品

パール・バックは両親が長老派教会の宣教師として中国で活動していたため、生まれて間もない1892年から中国で育ちました。そして、大学教育などでアメリカに帰国していた期間を除けば、1934年に立ち去るまでの大半を中国で過ごしています。『大地』は、そうした彼女が慣れ親しんだ地を舞台にした代表作ですが、今日では『大地』と言うとき、王龍から始まる三代の物語、すなわち「土の家三部作」と名付けられた、『大地』、『息子たち』、『分裂せる家』の三作全体を指すことが多く、ここでも三部作全体を視野に入れて話を進めてゆこうと思います。

三部作の第一作にあたる本来の『大地』は1931年に出版されました。1930年、『東の風・西の風』で作家デ

パール・バックは両親が長老派教会の宣教師として中国で活動していたため、生まれて間もない1892年から中国で育ちました。そして、大学教育などでアメリカに帰国していた期間を除けば、1934年に立ち去るまでの大半を中国で過ごしています。『大地』は、そうした彼女が慣れ親しんだ地を舞台にした代表作



『大地』は、新潮文庫の他にも様々な出版社から翻訳が出ている。

ビューしたパール・バックの二番目の作品で、出版と同時にベストセラーとなり、ピューリッツア賞を受賞、彼女を一躍、時の人に変えました。この作品は、中国の最下層に位置する貧しい農夫、王龍の結婚に始まり、夫婦して熱心に働くものの飢饉の年には飢えてしまう貧しい暮らしから、時代の変革を追い風に土地を買い広げ、大地主に成り上がってゆく様を扱っています。

続く第二作、『息子たち』は1932年に公表され、そこでは王龍の三人の息子、王大、王二、王三（王虎）の第二世代が、それぞれの方法でより豊かな生活を築き上げてゆきます。そして1935年に出版された第三作、『分裂せる家』では、王虎のひとり息子、王淵の成長を中心に、王龍の孫たち、第三世代が新しい時代の波に揉まれながら様々な道を選び取ってゆく様が語られます。

こうした三世代の物語の背景となる、19世紀終盤から20世紀初頭の中国は、日本の明治維新に似て、長く続いた清朝の支配体制が崩れ去るなかで、国内外の様々な勢力が覇権を争って混乱に拍車をかけていました。変化が起きていたのは政治体制だけではありません。第一作の初めでは、剃髪や纏足などの風習が色濃く残っていますが、それらは古い習慣として次第に廃れてゆき、第三世代には洋服やダンスが当たり前になっています。男尊女卑や年長者への恭順も、時代が下るごとに薄れてゆきます。こうした変化は結婚の在り方に顕著に現れています。当初、結婚は親や年長の親族が一方的に決めるものでした。しかし若い世代は当人の意志を尊重する自由恋愛へと傾いてゆきます。同時に、妾を囲う慣習も否定され、金銭的余裕があっても一夫一妻制が守られるようになります。

社会が大きく変化するなかでジェネレーションギャップが生じるのは当然ですが、『大地』ではその原因が時代の差に留まりません。当時の中国では貧富の差が極端に大きく、貧しい農民として苦勞しながら財を成して行く王龍と、貧しい時代の記憶はあっても大地主の息子として育った第二世代、貧しさをまったく知らない第三世代とでは、ものの受け止め方、理想とするものが、自ずと異なってしまふからです。さらに、広大な中国では「南部の都市」と「北部の田舎」では話し言葉や習慣さえ違います。第三世代には、淵のように異国での生活を体験する者さえいて、行動範囲の拡大によって新しい考え方や感じ方に

晒される機会も増えてゆきます。

このように、時代・世代・地理の三つの要素がジェネレーションギャップに拍車をかけるため、『大地』で己の生き方を追い求める男たちは、他の誰も歩いたことのない自分だけの道を独力で切り開かざるをえないと、必死になります。ところが、彼らを突き動かす人間的欲求を突き詰めれば、時代・世代・地理を超えて共通する、人間の本来の願望や関心が見えてくるように思えるのです。

『大地』における一途な男たち

『大地』は中国的視点から書かれ、王龍と彼に続く一族の物語は、家長として絶対的権力を振るう王家の男たちを中心に展開します。このような王家を、パール・バックは何度か大樹に見立て、王龍を大地にしっかり根を広げて育った幹に、息子たちをその幹から育った大枝に、喩えています。従って、北部の耕地を離れてそれぞれの道を歩む第三世代は散りゆく葉と言えるのかもしれませんが、バックはこの世代変化を栄枯盛衰という図式で捉えているわけではありません。というのも、王家の男たちは各々により良い生活を望み、皆、自分なりの方法で、手に入る最良の生き方を懸命につかみ取ってゆくからです。

まず、第一世代の王龍は、19世紀半ば過ぎと推測される時代、清朝の風習が根強く残る農村部で、僅かばかりの自分の土地を耕し、かろうじて暮らしています。婚礼や結納のための余分な金もなく、父親は大地主の黄家で不要になった、「若すぎず、それに、何よりも、別嬪じゃあねえ」、「家事もする、子供も生む、野良仕事もやるような」奴隷を、息子の嫁にもらい受けます。この結婚で、王龍は朝一番に起きて火をおこす必要がなくなり、同じ材料を用いながらもおいしく料理されたものを食べ、掃除が行き届いた家で、きちんと繕われた寝具や衣服を宛が



2006年、著者撮影：中国内陸部の農村。耕作に牛などが用いられ、上下水道も通っておらず、過去にタイムスリップしたかのようだった。

われて、貧しいながらも快適な暮らしができるようになります。

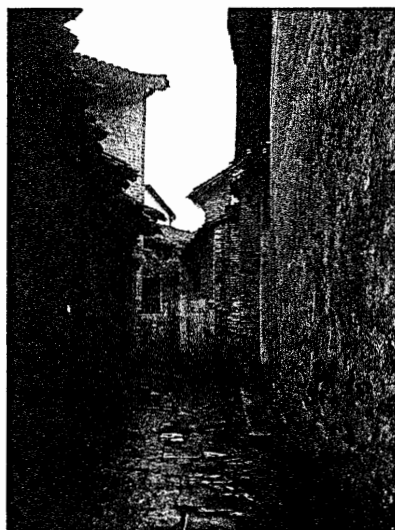
しかしこの慎ましい生活も、定期的に訪れる不作には耐えられません。一家は飢え死に寸前、家財道具を売ったお金で南の都市に落ちのび、王龍は人力車を引き、妻とふたりの息子は乞食をして糊口を凌ぎます。彼らの稼ぎでは北に戻る旅費さえ蓄えられません。ところが時代の流れが状況を一転させます。都市で暴動が発生し、近くの娼家が襲われ、偶然にも王龍の手に銀貨が転げ込んだからです。彼らはそのお金で自分の土地に戻って再出発を果たし、さらに、この時に妻が盗み取った宝石を元手に土地を広げます。王龍は自分や自分の子孫が、五年に一度の割でやってくる凶作の年に再び流民となることのないように、豊作の年の蓄えで食いつなげるようにと願い、広くなった土地を熱心に耕し、所有する土地を増やして、やがて黄家に代わる大地主になり上がってゆくのです。

生活に余裕が出来ると、王龍は美しくない妻を蔑ろにして妾を囲い、贅沢な生活に溺れてゆきますが、しかし老いてなお、「わたちは、土から生まれて、いやでもまた土へ帰るんだ——お前たちも、土地さえ持っていれば生きてゆける」と、土地へ強く執着し続けます。彼の生き様は、最後まで土地と繋がり、土地こそが自分の家族や子孫の幸福を守ってくれるという信念に支えられていました。

こうした王龍の思いとは裏腹に、三人の息子は誰ひとり農民になりませんが、それを息子の愚かさとし非難することはできません。というのも、たとえば長男、王大が学問をするようになったのは、文字が読めなかった王龍が土地取引の際に恥をかかされ、その苦い経験から、息子に学識があれば彼を助けることができるだろうと考えたからでした。事実、王龍も初めは王大の学識をおおいに誇ります。ところが、農作業に従事することなく、美しいものや高価なものに慣れ親しんで育った王大にとって、より良い生活とは贅沢で怠惰なものになっていました。彼は父親が死ぬと、いち早く不便な土地を売り払って生活の足しにします。さらに、残した良い土地を地主として管理する僅かな手間さえ、金持ちにはふさわしくない苦役と感じ、土地のいっさいを弟、王二

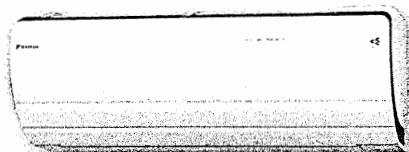
に任せて都会へ移り住んでしまいます。彼の生活は安楽に溺れきったもののように見えますが、彼はお金を存分に使った生活をして初めて金持ちの名に値すると感じており、父親が目指した豊かさを実践しようとしていただけなのです。

次男の^{ワシアル}王二の場合も、彼が商売を学ぶようになったのは、彼に土地の運用や管理を任せられれば一家の役に立つだろうと、^{ワシロン}王龍が判断したからです。^{ワシアル}王二は父が望んだとおりに商才を発揮し、^{ワシ}王家の土地管理も引き受けます。ところが、自分の結婚式にさえ無駄な出費を厭い、何事に対しても冷徹にそろばんをはじく^{ワシアル}王二は、父の死後、現金が必要になることに、土地



2006年、著者撮影：中国内陸部の村。冬は氷点下になるといいますが、窓にはガラスがはまっていなかった。

DAIKIN



うるさら7

DAIKIN Air Conditioner

ルームエアコンにおいて世界初!^{※1}
新冷媒 R32 採用

※1. 当社調べ：ルームエアコンにおいて、2012年11月1日発売。

ルームエアコン 4.0kWクラスにおいて、
業界トップ^{※2}の省エネ性

※2. AH40PPP (V) 省エネルギー消費電力率1.145kWh/PPF.0
JIS測定基準による、2012年11月15日現在。

平成24年度 一般財団法人省エネルギーセンター主催
省エネ大賞
最高賞
「経済産業大臣賞」受賞
(製品・ビジネスモデル部門)
受賞対象機種名: S40PTRXP, S56PTRXP, S63PTRXP, S71PTRXP

ダイキン工業株式会社 空調営業本部

ダイキンエナジーセンター
省エネ技術センター



全国共通
フリーダイヤル

0120-88-1081

ダイキンエアコンホームページ <http://www.daikin.co.jp/aircon/>

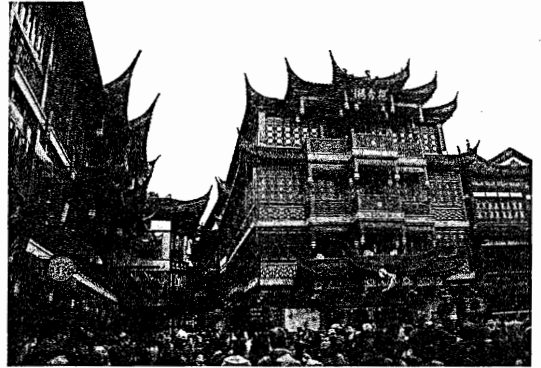
は決して手放さないようにという父の遺志を無視して土地を売り払います。ただ、自分の財産を守り、商いを少しでも広げて蓄財に励もうと熱心になるのは、王二なりに子々孫々のことを考えてのことで、その点では土地獲得に執着した王龍と何ら変わりません。

このように、王大と王二の場合は、父、王龍の出世に伴って父とは異なる環境で育ったために、父同様に子孫繁栄を願うより良い生活を求めながらも、父とは異なる生き方をするようになったのですが、王三の場合、その隔たりはもっと大きいように思えます。たとえば王三が時代の変化に言及し、「今まで聞いたこともないほどの戦争が、これから起るんです——今までに一度もなかったほどの革命と戦争があって、そして我々の土地が自由になるのです！」と、兵隊になり、「栄光」を得る夢を膨らませるとき、次々と土地を購入して大地主に成り上がった王龍には、土地がすでに十分に「自由」なものに思え、息子の言わんとするところが、すなわち、土地が耕す者に分け与えられる時代が来ようとしていることが、想像もつきません。王大が最後まで父の面倒を見、王二も一家の帳面を付け続けるのに対し、王三が家から離れてしまうのは、父が彼の初恋の相手を横取りしたという直接の原因より以前に、変化する時代の影響を受けた王三の思考が、兄たちよりも父からさらに遠ざかっていたからと考えられます。

結局、王三は新しい時代を味方につけて南の地で頭角を現すと、権力を得て墮落してしまう上司に背き、より民主的で統制の取れた軍を率いて北上します。そして、故郷近くの地を占拠していた匪賊を撃破し、王虎將軍としてその地を保護する一方、税金という形で軍用資金を徴収し、軍閥としての地位を築き上げます。王虎が部下に略奪を禁じ、秩序立った行動を取らせようと懸命に努力するように、彼の思考や行動には民主化の流れがある程度反映されています。また、それだからこそ、この時期に権力基盤を確立できたとも言えます。しかし、略奪に慣れきった兵を完全に押さえきれないように、王虎の軍には多分に古い体質が残っています。さらに彼自身、自分の権力は息子に引き継がれるものという封建的世襲を当然のこととし、息子のために権力基盤を強化しようとし、勇猛さにおいて父にも兄たちにも似ていないように見える王虎ですが、自

分の命を引き継ぎ、子々孫々が繁栄してゆくことを願う点では、彼らと何ら変わらないのです。

民主化へと向かう時代の激流は、^{ワンフー}王虎を父、^{ワンロン}王龍から引き離したように、^{ワンフー}王虎のひとり息子、^{ワンフー}淵を^{ワンフー}王虎から遠ざけます。優しい気性の^{ワンフー}淵は父が用いる武力を体質的に嫌っただけでなく、軍閥を撲滅されるべき対象と見なす若い家庭教師に養育され、父に反逆する新



2010年、著者撮影：上海、豫園エリア。「南の大都会」で淵はこのような豪華な建物を目にしたに違いない。

しい見解を自然に身に付けてゆきます。そうした両者の違いは、^{ワンフー}王虎が南部を好きになれず、結局は北部に引き返す一方で、^{ワンフー}淵が上海と思われる南部の大都市に腰を落ち着けることにも窺われます。もっとも^{ワンフー}淵はアメリカに留学するものの、決してアメリカを好きになることはありませんし、そこに永住もしません。従って^{ワンフー}淵と^{ワンフー}王虎の地域嗜好の差は時代の違いを反映しただけのもので、両者はともに、それぞれの時代の新しいものと古いものの影響を受けていると言えるかもしれません。それでも、^{ワンフー}淵の行動範囲が^{ワンフー}王虎よりも広がっていることは確かで、個性の違いや時代の変化に加え、この地理的広がりも、両者の見識を一層大きく隔ててしまうのです。

清朝の古い体制から西洋的で民主的な体制へと、また、儒教的な禁忌や束縛から自由で平等な思考へと、世の中が激変して行くなか、世代間の格差や、南北文化の違い、諸外国からの影響を受けて、『大地』の男たちが抱くより良い人生の形や、子供に対する期待は、それぞれ大きく異なります。そのため父は息子に常に失望し、苛立ちを募らせ、息子は父の生き方や意向に激しく反発せざるをえません。彼らひとりひとりが求める、己の心になかったより良い生活は、最終的には、自分の命をつなぐ子孫の安寧と繁栄といった、極めて人間的な願望に行き着くものであるにもかかわらず、父と息子が胸襟を開いて互いを受け入れ合うことは決してなく、誰もが人に理解してもらえない寂しさを囲いつつ、彼らを阻止しようとする様々な制約にひとり猛然と立ち向かわざるをえないと

感じています。彼らが自分の信じる道を必死に突き進む姿は、時には醜悪なほど傲慢に、時には愚劣なほど頑なで、余人を寄せ付けませんが、彼らの一途な姿の、その激しさ、純粋さ、力強さが、『大地』の大きな魅力になっています。

『大地』における忍従の女たち

『大地』の主軸をなす男たちが熾烈な願望に駆られて必死に突っ走る一方

で、女たちのなかには、不条理な扱いに不平を漏らすこともなく、苦難をじっと堪え忍びながら、手に入るささやかな幸せを大切にしてくる者がいます。女は男に従属し、自由に生きることがほとんど不可能だった、古いしきたりの名残とも言えますが、そんな彼女たちの静かな強さや優しい逞しさは、作品に心あたたまる温もりをもたらし、脇役である彼女たちの存在を無視できないものになっています。

たとえば、王龍の父が実利一辺倒で迎えた王龍の妻、阿蘭は、怠けることを知らない働き者で、表情というものがほとんどありません。しかし、感情のかけらも見せずに働き続ける妻を、「来る日も来る日も、静かに働いている」と思っていた夫は、妻が、奴隷として仕えていた黄家をいつか贅沢な月餅を手土産に再訪し、その時には「子供に盛装させ、そしてその子の母として、新しい着物を着て」と、実に具体的な夢を描き続けていたことを知って驚かされます。幼い時に両親を失い、黄家の奴隷として辛酸をなめ続けてきた阿蘭には、貧しい農夫の妻の座すら、より良い生活への第一歩であり、彼女はその幸せを確固たるものにし、もとの召使い仲間や奥様に誇示するという小さな夢に向かって、懸命に働き続けていたのです。夢という願望を実現しようと努めていた点では、阿蘭も男たちと変わりません。ただ、彼女の夢は実にささやかで、より多くのものを、より素晴らしいものをと、飽くことなく求め続ける男たちの、際限のない願望とは本質的に異なり、彼女の生き様を男達のそれとはまったく違った、慎ましく忍耐強いものになっています。

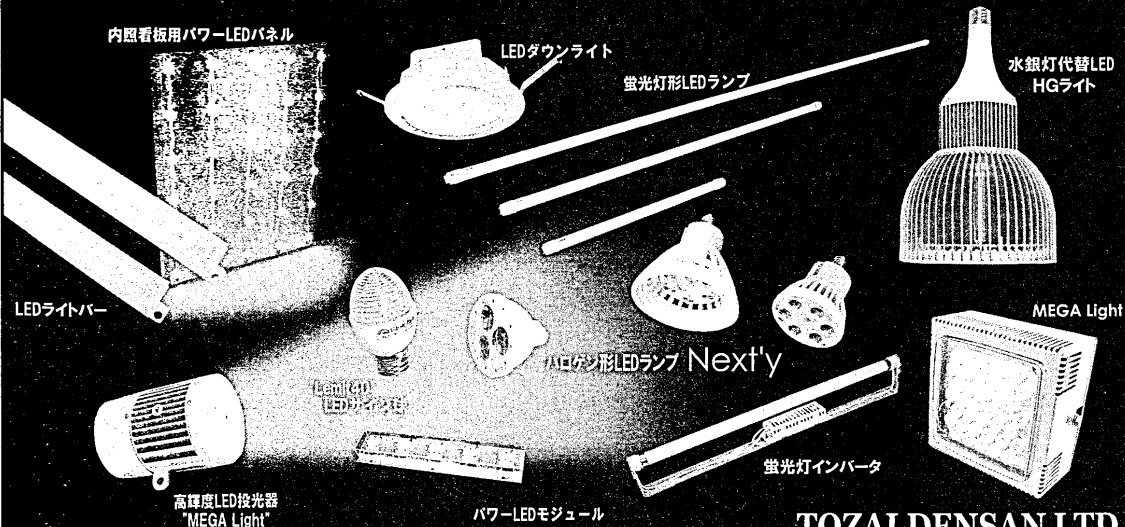
こうした女性らしい生き方は、年老いた王龍がかわいがった若い娘、梨花の選択にもっと明確に見て取れます。彼女は若い男に大きな夢を託すより、決して自分を傷付けないと確信できる老人の傍で、静かに暮らすことを幸福と考え

ます。王龍の死後も、彼女は王家の邸宅暮らしより、彼が昔住んでいた土の家での質素な暮らしを選び、知恵の足りない王龍の娘や、子供の頃に子守に落とされたために背が曲がり、誰にも顧みられない王犬の息子など、世間から置き去りにされた者を慈しみます。彼女にはそうした弱者の社会的地位を積極的に変える力はありませんが、自分よりもさらに弱い者をできる限り守ってゆこうとする姿には、人を押しつけてでも我を通そうとする男たちにはない、他者に対する温かい思いやりが溢れています。

阿蘭は黙々と為すべきことを為して死に、梨花は尼になって世間から遠ざかりますが、高い教育を受け、自由に行動できるだけの遺産を父親から受け継いだ王虎の第二夫人は、自分の意志に従ってしっかりと行動できる女性です。夫人には、夫、王虎の理解と愛を手に入れることも、ひとり娘の愛蘭に真面目な生き方をさせることもできませんが、彼女はその報われない思いをただ黙って耐えたり、嘆いたりして過ごすのではなく、孤児ホームを運営し、助けの必要な子供たちを援助することで、癒そうとします。そして、そうした孤児の中から美齡という少女の才を見抜き、手元に引き取って自分の夢を託そうとします。

TOZAI 照明・サイン用新光源システム (計画・設計・製造販売)

各種LEDランプ・照明用LEDモジュール・蛍光灯用インバータ



TOZAI DENSAN LTD.



新光源&次世代ライティングシステム

東西電気産業株式会社

本店 大阪市浪速区元町2丁目13番31号
TEL (06) 6649-1001 (代) FAX (06) 6649-5046
〒556-0016
東京店 東京都大田区上池台1丁目3番5号
TEL (03) 3784-3711 (代) FAX (03) 3784-3719
〒145-0064



ホームページ URL
<http://www.tozaidensan.co.jp>
ISO14001
認証登録事務所：本店

夫人はまた、淵が自分を頼ってきてくれたことを喜び、彼に惜しみない援助を申し出ます。それでも、「あなたがそうしたいのなら——そうしたい気があるのなら、そんなら、その時は、道を考えてあげますってことなんですよ」と、あくまで淵の気持ちを優先し、夫人の援助が差し出がましいものになることはありません。それ故、夫人の控えめな申し出には、自分の考えや欲求を第一に行動する男たちには見られない、相手の立場に立って相手を思いやる思慮深さや賢明さが窺われるのです。

パール・バックの両親と『大地』

パール・バックは1938年にノーベル文学賞を受賞します。その受賞理由

は、『中国における農民の生活の、豊かにして真実な叙事詩的描写と、彼女の伝記的諸傑作に対して』と説明されています。前半部分が『大地』についての言及であることは明らかですが、ノーベル賞の受賞理由では『大地』の「叙事詩的描写」と区別して、「伝記的諸傑作」が挙げられています。これは、「伝記的諸傑作」における鮮烈な人物描写が高く評価されたからに違いありません。というのも、伝記的作品のひとつ『戦う天使』(1936)は、パール・バックの父、アブサロム・サイデンストリッカーをモデルにしたものですが、作中でアンドリュウと呼ばれる父が、時には冷酷さと紙一重の徹底した信仰心をもって、貧苦に喘ぐ中国に救いをもたらそうと戦い続ける姿が、実に印象的だからです。また、これに先だって書かれた『母の肖像』(1936)でも、パール・バックの母、キャロラインをモデルにしたケアリと呼ばれる夫人が、夫の独善的な神への献身や、家族を顧みない身勝手さ、次々と子供たちを失ってゆく冷酷な運命を堪え忍びながら、中国の虐げられた女性たちのために身を粉にして働く様が、深い感動を呼ぶからです。

もともと、三世代にまたがる物語が生き生きと感動的に、大河のような流れをなして綴られている点が評価された『大地』でも、登場人物は「伝記的諸傑作」同様、実に強烈な個性を放っています。しかも、『戦う天使』のアンドリュウが見せる、非常に狭い視野や思考と、それ故に、混じりけのない一途な信仰心は、『大地』の王龍や王虎ら、男たちに共通して見られる激しい情熱と同質のもので

す。一方、『母の肖像』のケアリが見せる慈愛溢れる姿は、『大地』の女たちに、特に王虎^{ワンフー}の第二夫人と重なります。言い換えるなら、『大地』は中国を舞台に、中国の歴史や文化に寄り添って語られる物語ではあるものの、そこに描かれた人物にはパール・バックの両親の資質が強く反映されており、彼女にとって『大地』の男女の、世代や時代を超えた特徴は、洋の東西を超えたものであったことがわかります。

『大地』における伝記的要素としては、王龍^{ワンロン}の知恵遅れの娘にパール・バック自身の知恵遅れの愛児が重ねられていることも、よく指摘されます。こうして見ると、『大地』はパール・バックが両親や娘といった家族への想いをこめて書き上げた小説とすることができるかもしれません。

実際、『大地』で重視される家族や親族の繋がりも、パール・バック自身の、家族に対する深い想いを反映して見えます。この作品の登場人物は互いに激しくぶつかりあい、反目しあってばかりいますが、それは彼らの結びつきが非常に強く断ち切りがたいが故の、葛藤や煩悶に他なりません。それ故、息子がいかに自分の意に反した行動を取ろうとも、父は常に息子を思い、息子を見捨てることはありませんし、息子もまた、最後まで父との絆を断ち切ることはありません。父に逆らい続けた王虎^{ワンフー}でさえ、臨終に際しては父のもとに当然のように帰ってきますし、淵^{ユン}は危険を覚悟で、王虎^{ワンフー}の死の床に留まり続けます。

もちろん、『大地』に描かれる家族の強い絆には、中国固有の文化や慣習が深く関わっています。しかし布教活動に全身全霊を捧げていた父、アブサロムに引きずられ、母、キャロラインが、帰国を願いながらも最後まで家族の絆を守って中国に留まったり、パール・バック自身、アメリカで教鞭を執っているさなかでも、母の危篤を知るとすぐに中国に戻ったりしていることから、中国を特徴付ける家族や親族の強い繋がりも、洋の東西を超えた人間性と受け止められていたのではないのでしょうか。

むすび

新潮社の『大地』第四巻の最後に付された「解説」では、中国における『大地』の評価として、1960年9月に発表された李文俊の「アメリカ反動作家パール・バックの解剖」という論文が紹介され、「李文俊はその中で、パール・バックが1930年前後の中国農村の実情を描くにあたって、農民に対する地主階級の苛烈な搾取をまったく描いていないこと、当時『革命が及ぶ所では、幾重もの苦しみにあえぐ農民たちが、共産党の指導のもとに、団結し、武器をとり、反動勢力と決死の闘いをしていた』のに、それを描いていないことを指摘している」と述べられています。

確かに、『大地』には階級や時代に対する批判はほとんど見られません。その結果、一族郎党の繋がりが強く、同族を優遇するために賄賂が用いられ、特権が乱用されたりしても、それが社会問題として扱われることはありません。

彼女の著作姿勢が社会情勢を描いたり、社会問題を暴いたりするものでないことは、1939年に出版されたジョン・スタインベックの代表作であり、プロレタリア作品の傑作でもある、『怒りの葡萄』と比べれば一目瞭然です。『怒りの葡萄』では、登場人物は不況と不作によって耕作地を失い、希望を持って出かけたカリフォルニアでも搾取されるだけの、最底辺の人々です。何の手助けも与えられない、何の幸運にも恵まれない、虐げられた底辺から社会構造を眺めるため、社会の不正や不条理に自ずと目が向きます。



2010年、著者撮影：上海、外灘。かつての租界の面影を留める。愛蘭たちが出かけた華やかなパーティはこのような場所で開かれたのだろう。

これに対し『大地』では、本当に苦勞して土地を耕作するのは、第一世代の王龍夫婦だけで、その王龍でさえも、所有地を広げるうちに農夫らしい生活から離れてしまいます。そのため三部作の大部分は、極めて少数の特権階級を描いた物語になっています。しかも王龍の転機は、たまたま転がり込んだ他人の金と盗んだ宝石によるもので、

彼らの正直な労働で勝ち得たものではありません。^{ワンフー}王虎が権力地盤を固める時も、天候や世情が幸いしています。第三世代になると、生活費を自分の手で稼ごうと考えることもなく、それでいて、上海と思われる大都市の租界で開かれるダンスパーティに明け暮れたり、何年もアメリカに留学したりします。彼らの誰もが自分なりの生き方を求めて必死にならざるをえないとしても、彼らの生活は一般の中国人には夢のようなもので、こうした登場人物たちの視点から語られる物語が、当時の中国社会全般の情勢を映し出しうるはずがないのです。

『大地』ではまた、場所を示すのにも、「北方」とか「南の町」、「海岸の都会」といった、漠然とした表現しか用いられません。年代も明示されず、登場人物が巻き込まれる出来事が歴史的にどういう事件であったのか、具体的に述べられることもありません。作品の背景が意図的に抽象化されているのは明らかで、こうすることによって中国の現状を社会的視点から扱っていないことを明示しているように見えます。

中国はアメリカの読者にとって興味深い異国だったかもしれませんが。しかしパール・バックにとっては、幼い頃から慣れ親しんだ世界にすぎなかったのではないのでしょうか。そして、『戦う天使』や『母の肖像』同様、『大地』においても、彼女の関心はもっぱら、彼女の身近な場所で懸命に生きる人々の生き様にあったのではないのでしょうか。それ故、地理や時代をあえて曖昧に保つことで人の姿に焦点を当て、激変する時代や不安定な情勢に翻弄されながらも、父のように使命に燃えた一途さで必死に何かを追い求める男たちや、母のように多くの苦悩や葛藤を堪え忍びながら、信じる道を静かに実践する女たちの、様々な生き様を際立たせたのだと思います。その結果、これらの人々が伝える、世代も、時間も、地理も超えた人間の有り様は――各々の心になかった生き方を求めて互いにぶつかりあいながらも、深い絆を保ち続けて生きる人間の姿は――、洋の東西さえも超える普遍性を帯びて、私たちの心を強く打たずにはおかないのでしょう。

結局、『大地』は何かひとつの具体的な生き方や方向を提唱する作品ではありません。そこに描かれる生き様は千差万別で、欠点もあれば長所もあり、また見方によって受け止め方も評価も違ってきます。しかし、ありありと描かれる

登場人物たちの姿に自分自身を重ねながら、自分は誰を思い、何のために行動しているのか考えてみれば、この時代に、この場所で、私たちが選ぶべき次のステップが見えてくるような気がします。

 本論の引用には、新居格訳、中野好夫補訳、『大地(一)～(四)』(新潮文庫)を使用しました。

新田 玲子 (にった・れいこ)

1954年、広島県尾道市生まれ。広島大学文学部、及び広島大学大学院文学研究科博士課程で英語学英文学を専攻。在学中、1979年から80年に、文部省学生交流制度による奨学金を得てアメリカ合衆国のミシガン大学に一年間留学。

1985年、博士課程後期を単位取得で退学し、広島経済大学の英語講師に着任。4年間勤務したのち、1989年、信州大学人文学部助教授に転出。同学部及び人文学研究科で8年間アメリカ文学を教える。

1997年、広島大学文学部助教授に配置転換。文学部及び文学研究科において、第二次世界大戦以降の新しいアメリカ文学、及びユダヤ系アメリカ文学を教える傍ら、2004年、J.D. サリンジャー研究で広島大学大学院文学研究科より博士(文学)を取得。

2005年、広島大学大学院文学研究科教授に採用。現在は国内外の研究者と積極的に交流しながら、主として1970年代以降のポストモダンのアメリカ文学、第二次世界大戦後の新しいユダヤ系アメリカ文学、アメリカにおける新しい戦争文学についての研究に力をいれている。また、大学内ではアメリカ文学専任担当教員として文学研究科生と文学部生にアメリカ文学を幅広く教え、若いアメリカ文学研究者の育成に努める一方、学外に向けては、翻訳やインタビューを通し、新しいアメリカ作家を紹介している。さらに、新聞にコラムや書評を掲載したり、一般市民向けの講演をしたりと、幅広い文学活動を行っているだけでなく、信州大学准教授で認知心理学者の菊池聡氏と、『クリティカルシンキング ―― 不思議現象篇』(北大路書房)を共訳するなど、分野の異なる活動にも従事している。

代表的著書としては、『サリンジャーなんかこわくない』(大阪教育図書出版)などの文学批評書の他、ウォルター・アピッシュの代表作、『すべての夢を終える夢』(青土社)の翻訳がある。